

平成4年3月 発行

大東文化大学紀要 第30号 抜刷

〈人文科学〉

中国語訳・有島武郎「四つの事」をめぐって

——『現代日本小説集』所載訳文を中心に——

小川 利 康

Bibliographical Study on Chinese Translations of Arishima Takeo's
FOUR THINGS by Zhou Zuo-ren

Toshiyasu Ogawa

中国語訳・有島武郎「四つの事」をめぐる

——『現代日本小説集』所載訳文を中心に——

小川 利 康

Bibliographical Study on Chinese Translations of Arishima Takeo's FOUR THINGS by Zhou Zuo-ren

Toshiyasu Ogawa

目 次

問題の所在——中国語訳「四つの事」の持つ意味

I 『現代日本小説集』成立の周辺

II 「關於作者的説明」各項の検討

(1) 初出誌「訳文付記」との比較検討

(2) 初出誌が存在しない項目の検討

III 「四つの事」訳文の検討

(1) 訳文A Bの比較

(2) 訳文Cの検討

(3) 『現代日本小説集』後の翻訳書

結語 周作人に於ける有島文学受容

問題の所在——中国語訳「四つの事」の持つ意味

魯迅の有島文学受容は、これまでも少なからず関心を集めてきた問題である。所謂「窮屈な考え方」を捨てることなく自死の道を選んだ有島武

郎、二七年以降の革命文学論戦を通じて独自の理解でマルクシズムを受け入れていった魯迅、この対照的な同時代の作家の接点を探る論考は既にかなりの数に上る。¹⁾ それら多くの論考で検討された文章の中に、有島武郎のエッセイ「四つの事」の翻訳（有島を紹介する文章を含む）がある。これは周作人との共訳『現代日本小説集』所収の「關於作者的説明」の中で収録されたものであった（別表3に翻訳箇所全文）。このエッセイの翻訳は今日まで魯迅の手になるものとされ、現行の魯迅全集にも収められている。しかしながら、共訳である単行本に無署名で収録された文章を魯迅の作であると確定できる根拠は管見の限りでは存在しない。また、『現代日本小説集』に収録される以前に殆ど同一の文章が周作人の名で雑誌『東方雜誌』に発表されており、魯迅の作とするのは実は誤りであったのではないかと考えられる。

従来の魯迅全集では、「關於作者的説明」から魯迅が担当した作家の項目だけを収録している。この編集方針は、解放前の『魯迅全集』（魯迅先生紀念委員會刊）から現行の魯迅全集（第十巻『譯文序跋集』所収）に至るまで一貫している。こうした編集方針の根拠は、恐らく『現代日本小説集』序での「夏目漱石、森鷗外、有島武郎、江口渙、菊地寛の作品は魯迅が訳した」という周作人の言葉にあると考えられるが、周作人の言葉は作品翻訳に即してであり、附録についての言ではない。翻訳担当者自身が「關於作者的説明」も書いたという推測は充分可能ではあるが、あくまでも推測に止まるであろう。また、魯迅の他に周作人による翻訳も存在する以上、訳者を魯迅に確定するには根拠が不十分と言わねばならない。更にこうした問題は資料的重要性の違いはあっても、「關於作者的説明」中の有島武郎以外の作家の項目についても言えることであり、魯迅だけでなく、周作人の訳業も含めて検討し、これまでの資料的不備を補う必要がある。

本稿では、『現代日本小説集』成立までの経緯の検討、同書所収「關於作者的説明」各項と魯迅周作人が雑誌発表した翻訳とのテキスト比較を通して、「四つの事」の翻訳ばかりでなく、他の「關於作者的説明」も大部分が周作人の手になることを明らかにしてゆきたい。

I 『現代日本小説集』成立の周辺

——日記書簡からの検討

『現代日本小説集』の編集経過は魯迅周作人との間で交わされた書簡によって知ることができる。訣別直前まで八道湾に同居していた二人の間の書簡が例外的に残されているのは、二二年の夏に周作人が西山で療養生活を送っていたためである。周作人の発病がなかったならば、両者の協議内容は文字となつて残らなかった違いはない。従つて、魯迅周作人の書簡では二二年六月以降からしか確認できないものの、実際には周作人編訳『点滴』刊行後の二〇年後半頃には同書の計画が進んでいたと想像される。資料が限られてはいるが、ここでは日記書簡等によりつつ、『現代日本小説集』成立までの経緯をまとめておきたい。

『現代日本小説集』編集の具体的な内容について初めての言及は、二二年八月二九日付の魯迅の周作人宛の書簡に見える。

日本小説集の目録は、もうこんな所でだいぶ良いけれど、まだ何人かの数篇を加えるべきだ。例えば加能など。佐藤春夫も他にもう一篇加えるべきだろう。

文中の「日本小説集の目録」とは、西山にいた周作人が末弟周建人に託したもので、採録する作家や作品名を記したものと考えられる。また、これに先立つ六月三〇日の周作人宛書簡でも採録すべき作品ついて、魯迅が意見を述べている。

「右衛門の最期」はもう訳了したが、跋はまだ、(中略)。夏目物は「一夜」を訳すことにした。「夢十夜」は長すぎる。彼の「永日物語」から選んでもよければ、「クレイグ先生」が良いと思う。

「右衛門の最期」とは菊池寛の作品である。「永日物語」とは「クレイグ先生」を含む『永日小品』の謂であろう。ここに挙げられた作品のうち「一夜」「夢十夜」以外は、全て『現代日本小説集』に収録されている。書簡という性質上省略が多いが、雑誌に発表する翻訳の相談とは考えにくく、同書に収録すべき作品を相談する文面と見て間違いないだろう。これらの文面を読む限りでは、当時二二年半ばには採録予定の作家作品も固まっており、恐らくは出版社の当てもついていたと思われる。

しかし、周作人の許へ上海滞在中の胡適から二通の手紙が舞い込む。魯迅周作人の著作を商務印書館から刊行して欲しいというものであった。周建人の就職の世話を頼まれていた胡適は手紙で商務印書館が周建人を薄給ながら受け入れる用意があることを知らせると共に、次のように提案したのであった。

君達兄弟の書いた小説はもう一冊にまとめられると思う。一冊にまとめて『世界叢書社』から出版しませんか。それに『点滴』の後に、君が訳した小説も随分になるのだから、一冊『世界叢書社』から出版してほしいと思う。『点滴』は誤植が多すぎるのに、とても失望しました。商務の印刷なら、その欠点はありません。

第一に述べる「小説」とは、魯迅周作人の小説や散文を指すのであろう。第二に述べる「点滴」後の翻訳とは、周作人を念頭においてのものであろう。当時、胡適は商務印書館から体制改革への助言を乞われ、上海に滞在していた⁷。従って、この書簡は胡適個人の意向よりも、多分に商務側の意を体したものであると考えられる。周建人の就職にしても、胡適が商務側との交渉の窓口になったわけであるから、同じ書簡の中で商務側の意向を代弁しても不自然ではあるまい。とすれば、事実上、就職との交換条件に近いものであったといえよう。にもかかわらず、魯迅は当初胡適の提案に対して消極的であった。九月四日の周作人宛の書簡で次のように述べている。

彼は我々の小説を出したがっているが、私の作品は『世界叢書』にふさわしくなく、翻訳はまだいくらもなく、多くは先約があるので、後日他に訳したものを出すしかあるまい。⁸

つまり、胡適の出した第一、第二のいずれの要望も受け入れないというものであった。これは文中でも述べるとおり、当初の計画での『現代日本小説集』は出版社などの「先約」が既にあったため難色を示したものであろう。しかし、結果的には第二の提案に近い形で『現代日本小説集』が実現したのは、他にも様々な理由が介在したにせよ、胡適側の要望を無視できなかったためであらう。『現代日本小説集』の再版本の表紙に「胡適校」と記されているのは、そうした当時の事情を物語るものである⁹。また、周作人の翻訳作品を中心とした兄弟三人による『現代小説譯叢』も一足早く二年五月に商務印書館から刊行されている。確かに胡適の言葉通り「点滴」以後の周作人の翻訳作品は二冊のアンソロジーにまとめられて、商務から刊行されたのである。

いま一度、二人の日記書簡に戻ろう。二二年夏以降の周作人日記には『現代日本小説集』『現代小説譯叢』の編集に関する記述が頻出し、編集作業の中心が周作人であったことを示している。二二年二月二三日の項では次のように記している。

午前、大学へ行き、小説集原稿を適之（胡適・小川）に渡し、昼に帰る。¹⁰

『現代小説譯叢』に収められた周作人の序文に付記された日付が一九二二年二月二三日であるから、この「小説集」とは『現代小説譯叢』の原稿を意味することが判る。この頃の魯迅日記に同書への言及がないので、編集作業は周作人が中心となったことが窺われる。刊行準備がいつから始まったかは確定できぬものの、同書所収作品の殆どは雑誌に発表済みであったため、比較的早く編集できたのであろう。それに対し、『現代

『日本小説集』の編集作業は、翻訳の仕上がりを待って、翌三二年四月五月頃から始まった。周作人日記には、次のような『現代日本小説集』編集に関する記述が見いだされる。

四月三〇日 「日本小説集」の編集整理に着手。

五月 五日 午後、編集整理。

五月 六日 付録の編集整理を終える。

五月一七日 「日本小説集」を編集。午後終える。

五月二十九日 適之（胡適・小川）に手紙、及び原稿二冊を送る。¹¹

こうした記述は『現代日本小説集』の序文執筆の日付の五月二〇日と符合する。五月二十九日に送られた原稿が同書のものであることは間違いない。従って文中で言う「編集整理（原語では「編理」）」とは、既に雑誌発表済みのものも含め、原稿を整理することを意味し、五月六日の記述は附録である「關於作者的説明」の編集を終えたことを意味している。一方、同年の魯迅日記は周知の通り失われており、参与の度合いを確かめることがないが、『現代小説譯叢』での状況からすれば、周作人が主として編集にあっていた可能性が高いであろう。既に引いた魯迅書簡からも窺われるように、魯迅の役割は作品の選択上の助言・担当作品の翻訳に止まっていたと推測できるのである。

Ⅱ 「關於作者的説明」各項の検討

——テキストレビューでの検討

(1) 初出誌「訳文付記」との比較検討

「關於作者的説明」各項の文章は、従来それぞれが担当した作家に関する説明を自分で書いたと考えられてきた。しかし、冒頭でも述べたように、十分な裏付けに欠けるものである。ここでは、どれが魯迅あるいは周作人の文章と言えるのか、テキストの比較検討によって具体的に確定して行きたい。まず、『現代日本小説集』に収録された作品・作家を翻訳の担当者別に列記すると、以下の通りである。

魯迅担当

夏目漱石 「掛物」「クレイグ先生」

森鷗外 「あそび」「沈黙の塔」

有島武郎 「小さき者へ」「お末の死」

江口渙 「峡谷の夜」

菊池寛 「ある敵討の話」「三浦右衛門の最期」

芥川龍之介 「鼻」「羅生門」

周作人担当

国木田独步 「少年の悲哀」「巡査」

鈴木三重吉 「金魚」「写真」「黄昏」

武者小路実篤 「久米仙人」「第二の母親」

長與善郎 「亡き姉に」「山の上の観音」

志賀直哉 「網走まで」「清兵衛と瓢箪」

千家元麿 「深夜のラッパ」「バラの花」

江馬修 「小さい一人」

佐藤春夫 「私の父と父の鶴の話」「黄昏の人間」

加藤武雄 「郷愁」

これらの翻訳の大半は、同書収録以前に「訳文付記」とともに雑誌に発表されている（「訳文付記」とは便宜的につけた呼称で、文末に付記された作者に関する説明を指す）。多くの場合、この「訳文付記」が「關於作者的説明」の原型となっており、「關於作者的説明」各項の作者を確定する手がかりとなる。まず、初出誌「訳文付記」と殆ど一致する作家を掲げる。国木田と千家の場合は、初出誌が複数となっており、厳密には初出誌とは言えないが、一部省略して、文章を構成し直したもので内容は他と同様に一致する。（カッコ内の付記は該当する初出誌名、新聞では発表西暦下二ケタの年及び月日、雑誌では巻及び号を記した）

魯迅

菊池寛「三浦右衛門の最期」(『新青年』9/3)

周作人

国木田独歩「少年の悲哀」(『新青年』8/5) 及び

「巡査」(『晨报副鰲』21/10/19、20)

志賀直哉「網走まで」(『小説月報』12/4)

千家元麿「深夜のラッパ」(『新青年』8/4) 及び

「バラの花」(『新潮』3/1)

加藤武雄「郷愁」(『小説月報』12/1)

それぞれの異同を細かく検討する作業は煩瑣にわたるので省略するが、内容的に文字通り初出誌と呼んで差し支えない範囲である。また、いずれも魯迅・周作人日記から本人の執筆が確認でき、魯迅の名で周作人が代作した、あるいは逆のケースもありえない。更に右のように完全とは言えないまでも文章の大半が一致するものとして、次の二作家が挙げられる。

魯迅

芥川龍之介「鼻」『晨报副鰲』(21/5/11)

「羅生門」『晨报副鰲』(21/6/16)

周作人

鈴木三重吉「金魚」『東方雜誌』(18/24)

芥川龍之介「鼻」「羅生門」二篇の「訳文付記」は合成され、更に加筆されている。鈴木三重吉「金魚」は「訳文付記」をもとにして書き直した形跡がうかがわれ、文章が完全に一致するところは少ないが、個々の語句では共通点が多い。この二作家についても日記によって魯迅・周作人本人の執筆が確認できる。以上は全て従来の見解を補強するものに過ぎないが、いずれも本人の執筆によると考えて問題ないであろう。

(2) 初出誌が存在しない項目の検討

残されたのは、A・雑誌発表の「訳文付記」が当該作家の「關於作者的説明」と全く一致しないケース、B・雑誌に「訳文付記」が発表されていないケースである。ただし、江馬修（周作人）・江口渙（魯迅）については「關於作者的説明」の文章が数十字と極めて短く、単なる経歴の羅列で、比較が不可能なので検討対象から除外するとして、その他でA・Bに相当するのは、次の通りである。（カッコ内は作品の翻訳担当者）

A 森鷗外（魯迅）

武者小路実篤・佐藤春夫（周作人）

B 夏目漱石・有島武郎（魯迅）

長與善郎（周作人）

このうち幾つかの翻訳自体については日記で魯迅周作人それぞれの執筆が確認できるのだが、「訳文付記」が存在しなかったり、「訳文付記」が存在しても「關於作者的説明」と全く一致しないため、「關於作者的説明」の作者の問題は依然として残ることになる。

そこで翻訳作品自体の初出誌に拘泥せずに、これらの作家に関する言及を魯迅・周作人の作品から広く探して行くと、意外な事実突き当たる。邦訳版『魯迅全集』の訳注においても担当の小谷一郎氏が一部指摘されているように、「關於作者的説明」中の夏目漱石と森鷗外の項は周作人が一九一八年に行った講演「日本近三十年小説之発達」^①（以下「小説之発達」と省略）と内容的にかなり重複しているのである。

まず、夏目漱石の項から比較して行く。「小説之発達」「關於作者的説明」の双方の内容を文章の流れに従って段落を区切り、対照させてみたのが別表1である。ほぼ共通すると見なせるのは、「略歴の紹介」「余裕派文学」「夏目漱石による余裕派定義」の三箇所である。まず、最初の略歴は、字句に多少の出入りが有るものの、大きな違いはみられない。第二の「余裕派文学」でも、「彼の主張するのはいわゆる“低廻趣味”で、余裕派の文学とも称される」と述べる一節は完全に一致し、異なるのは句読点のみである。第四の「夏目漱石による余裕派定義」では、「小説之発達」が文語訳、「關於作者的説明」が口語訳と異なるものの、後者には文語的表現がなお残り、修正の跡を窺わせている。一方異なるのは、「初期の漱石文学」「余裕派定義の解説」「後期の漱石文学」の三箇所、現代日本小説集^②では欠落している。だが、これらのうち二つまでは漱石の文学活動歴の紹介で、残り一つも漱石の言葉の解説であり、文章の骨格から見れば副次的性格を持つ箇所と考えられ、この二篇の文章が同一の発想で書かれたことを否定するほどの比重はないであろう。いわば「關於作者的説明」は「小説之発達」のダイジェスト版と見なせるのである。

別表1《夏目漱石》

「日本近三十年小説之发达」

——略歴の紹介——

这非自然主义文学中，最有名的，是夏目漱石。他本是东京大学教授，后来辞职，进了朝日新闻社，专作评论小说。

——余裕派文学——

他所主张的，是所谓“低徊趣味”，又称“有餘裕的文学”。

——初期の漱石文学——

当初他同正岡子規，高濱虚子等改革俳句，发刊一种杂志，名字叫鸟名的《子規》(Hototogis)，他最初做的小说《我是猫》就载在这种杂志上面。是中学教师家里的一只猫，记他自己的经历见闻，狼是诙谐，自有一种风趣。

——夏目漱石による余裕派定義——

高濱虚子做了一部短篇集，名曰《鸡头》(即是鸡冠花)，漱石作序，中间说——

餘裕の小説，即如名字所示，非急迫の小説也，避非常一字之小説也，日用衣服之小説也。如借用近来流行之文句，即或人所谓触着不触着之中，不触着の小説也。……或人以为不触着者，即非小説；余今故明定不触着の小説之范围，以为不触着の小説，不特与触着の小説，同有存在之权利，且亦能收同等之成功。……世界广矣，此广阔世界之中，起居之法，种种不同。随缘临机，乐此种种起居，即余裕也。或观察之，亦餘裕也。或玩味之，亦餘裕也。

——余裕派定義の解説——

自然派说，凡小説須触着人生，漱石说，不触着的，也是小説，也一样是文学。并且又何必那样急迫，我们也可以缓缓的，从从容容的赏玩人生。譬如走路，自然派是急忙奔走；我们就缓步逍遥，同公园散步一般，也未始不可。这是餘裕派的意志同出来。

——後期の漱石文学——

漱石在《猫》之后，《虞美人草》也是这一派的餘裕文学。晚年作《门》和《行人》等，已多客观的倾向，描写心理，最是深透。但是他的文章，多用说明叙述，不用印象描写；至于构造文辞，均极完美，也与自然派不同，独成一家，不愧为明治时代一个散文大家。

『現代日本小説集』「关于作者的说明」

——略歴の紹介——

夏目漱石(Natsume Soseki, 1867-1917) 名金之助，初为东京大学教授，后来辞去入朝日新闻社，专从事于著述。

——余裕派文学——

他所主张的，是所谓“低徊趣味”，又称“有餘裕的文学”。

——初期の漱石文学——

(欠落) *類似した内容が「漱石文学の特色」に組み込まれた。

——夏目漱石による余裕派定義——

一九〇八年高濱虚子的小説集《鸡头》出版，夏目替他做序，说明他们一派的态度：

有餘裕の小説。即如名字所示，不时急迫の小説，是避了非常这字の小説。如借用近来流行的文句，便是或人所谓触着不触着之中，不触着的这一种小説。……或人以为不触着者，即非小説；但我主张不触着の小説不特于触着の小説，同有存在的权利，而且也能收同等的成功。……世间很是广阔，在这广阔的的世间，起居之法，也有种种的不同；随缘临机的乐此种种起居即是餘裕，观察之亦餘裕，或玩味之亦餘裕。有了这个餘裕才得发生的事件以及對於这些事件的情绪，固亦依然是人生，是活泼泼地之人生也。

——余裕派定義の解説——

(欠落)

——後期の漱石文学——

(欠落) *但し、類似した内容が「漱石文学の特色」に組み込まれた。

——漱石文学の特色——

夏目的著作想像丰富，文词精美见称。早年所作，登在俳谐杂志子規(Hototogisu)上的哥儿(Bocchan)我是猫(Wagahaiwa neko de aru)诸篇，轻快洒脱，富于机智，明治文坛上的新江戸艺术的主流，当世无与匹者。

(以下は訳出作品の原書単行本名の列記)

一方、森鷗外の方は事情がやや複雑である。「小説之発達」のほかに、『現代日本小説集』入稿（五月二十九日）後の七月二十四日発表の追悼文「森鷗外博士」が「關於作者的説明」と酷似しており、先に結論から述べてしまえば、周作人は「小説之発達」を元にして他の二篇を前後して書いたと推測されるのである。

漱石と同様、別表2のテキスト比較によつて検討する。略歴については、述べる順序が違っただけで殆ど同一である。この中で述べる文学史上の功績は別表2の各文中の傍線部Aに見られるように、「小説之発達」で殆ど欠落し、経歴紹介で「翻訳の他に、多くの著作がある。」と述べるに止まる。だが、「關於作者的説明」ではやや具体化し、「森鷗外博士」では作品名を列挙して詳しく紹介している。第二の「あそび」については、傍線部Cに見られるように「小説之発達」では小説から一節引用し、「森鷗外博士」では一部を地の文に織り込む形で引用するが、「關於作者的説明」では結論的な評価のみに止まる。ここでの異同は、魯迅訳「あそび」が『現代日本小説集』に収録されているために生じた異同であろう。ただし、各テキスト中の傍線部Cに見られるように「理知的」「熱のない」「虚無的」な態度を「あそび」に見いだしている点では共通している。第三の「杯」については、「小説之発達」では欠落し、「あそび」引用の省略を補うために加えられた箇所と考えられる。傍線部Dに見られるように「關於作者的説明」では引用文を中心とし、「森鷗外博士」では引用文を切り詰めて要旨のみを述べているが、同趣旨の内容である。以上の比較から、行文にかなり違いがあるものの、文章の論旨においては、なお多くの共通点を認めることができる。従つて、同一人物、すなわち周作人の手になる三篇の文章と考えると無理はないと考えられる。ただし、「森鷗外博士」が「關於作者的説明」以後に発表されているため、魯迅が「關於作者的説明」を執筆した後、周作人が入稿前に参照して「森鷗外博士」を書いた可能性も全くないわけではない。しかし、魯迅が鷗外を論じた唯一の文章である「沈黙之塔」訳者附記は、「關於作者的説明」と何ら共通点がない。とすれば、魯迅よりも周作人が書いたと考えるほうが、はるかに蓋然性が高いであろう。

ここまでで有島武郎を除く魯迅担当の作家については全て検討が済んだことになる。残されたのは周作人が担当した武者小路実篤、佐藤春夫、長與善郎である。これらの作家については、周作人、魯迅の当時の文章から初出誌と見なし得るものを見いだすことは出来なかった。魯迅が武者小路に言及した文章は限られており、佐藤・長與については、皆無である。従つて、これら三作家についてはテキストレベルでの検討を断念せざるを得ない。だが、以上の検討に加え、魯迅の佚文が今後発見される可能性が極めて低いこと、更に前段までの検討で明らかになった周作人中心の編集作業の実態を考慮すれば、『現代日本小説集』附録編集の際に、周作人自ら筆をとつて書いた項であると考えるのが妥当であろう。

以上の検討結果を整理するならば、魯迅が実際に執筆したと確定できるのは、菊池寛・芥川龍之介の項に限られ（材料不足で検討の対象から除外した作家を除く）、その他の魯迅担当（夏目・森）も含めた残りの項目は全て周作人の手になると考えることが出来るよう。

別表2《森鷗外》

「日本近三十年小説之发达」

——略歴の紹介——

森鷗外本は医学博士，兼文学博士，充军医总监，现任博物馆长，(A)翻译以外，多有(B)创作。

『現代日本小説集』「关于作者的说明」

——略歴の紹介——

森鷗外 (Mori Ōgai, 1860-) 名林太郎，医学博士又是文学博士，曾任军医总监，现在为东京博物馆长。他与坪内逍遙上田敏諸人最初(A)介绍欧洲文艺很有功绩。后又(B)从事创作，著有小说戏剧甚多。

追悼文「森鷗外博士」

——略歴の紹介——

森鷗外 (Mori Ōgai) 名林太郎，生于一八六〇年。毕业医科大学，留学德国，专研究卫生学，归后进医学博士，后又授文学博士，任军医总监及东京博物馆长。今年七月十日肾脏病卒，年六十三岁。

在日本近三十年的文学界上，森氏留下极大的功绩，与坪内逍遙博士并称。他在新文学初兴的时候供著许多精密的介绍翻译，到后来自然主义兴起，风靡一时，他以超然的态度，独立著作，自成一家，但一方面(A)翻译欧洲大陆的作品仍不断，最著名者有丹麦安徒生的《即兴诗人》，德国歌德的《浮士德》，《哥德传》及《浮士德考》等，此外《一幕物》，《现代小品》，《十人十话》，与《蛙》等亦均有名。(B)著作则有戏剧《我的一幕物》，小说集《涓滴》(后改题《还魂录》)，《走马灯与分身》，《高濂舟》，长篇《青年》及《雁》，传记故事《天保物语》，《山房札记》等数十种。

——「あそび」に見られる鷗外の文学主張——

他近来的主张，是遣兴文学。短篇小说《游戏》(Asobi) 的里面说：

这个汉子就是著作的时候，也同小孩子游戏时一样的心情。这并不是说，他就一点没有苦处，无论什么游戏，都须得超过障碍。他也晓得艺术不是玩耍，也自觉得倘将自己用的家伙，交与真的巨匠大家，也可造成震动世界的作品。但是虽然自觉，却(C)总存着游戏的心情。……总之在木村无论作什么事，都是一种游戏。

这几句话，很可见他的态度。(C)他是理知的人，所以对于凡事，都这一副消极的态度，没有兴奋的时候，颇有现代虚无思想影响。所以他的著作，也多不触着人生。遣兴主义，名称虽然不同，到底也是低徊趣味一流，称作余裕派，也没什么不可。

——「杯」について——

(欠落)

——「あそび」に見られる鷗外の文学主張——

他的作品，批评家都说是(C)透明的智的产物。他的态度里是没有「热」的。他对于这些话的抗辩在游戏这篇小说里说得很清楚。

*『現代日本小説集』に魯迅訳「あそび」が収録されたため省略された。

*「あそび」への言及は下段へ。

——「杯」について——

(D)他又在杯(Sakazuki) 里表明的创作的态度。有七个姑娘各拿了一只雕着「自然」两字的银杯，也来舀泉水喝。第八个姑娘拿出一个冷的熔岩颜色的小杯，也来舀水。七个人见了很讶怪，由侮蔑而转为怜悯，有一个人说道，「将我的借给伊吧？」

「第八个姑娘的闭着的嘴唇，这时候才开口了。“Mon verre n'est pas grand, mais je bois dans mon verre.”」

这是消沉的但是锐利的声音。

这是说，我的杯并不大，但我还是用我的杯去喝。」

(以下は訳出作品の原書単行本名の列記)

——「杯」について——

《涓滴》在一九一〇年出版，其中有《杯》及《游戏》二篇最可注意。因为他著作的态度与风格在这里边最明显的表现出来。(D)拿着火山的熔岩的陶杯的第八个少女，不愿借用别人的雕着「自然」两字的银杯，说道，“我的杯并不大，但我用自己的杯饮水，”这即是他的缩影。

——「あそび」に見られる鷗外の文学主張——

《游戏》里的木村，(C)对于万事总怀着游戏的心情，无论做什么事，都是一种游戏。但这乃是(C)理知的人的透明的虚无的思想，与常人的生活为遣遣者不同，虽当时颇遭文坛上正统派的嘲弄，但是即系现代人的心情，当然有其存在的价值。这种态度与夏目漱石的所谓低徊趣味可以相比，两家文章的清淡而隽润，也正是一样的超绝。不过森氏的思想保守的分子更少，如在《沉默之塔》一篇里可以看出。这篇原来登在生田长江译尼采的《札拉图斯特拉》上，当作序文，有汉译，收在《现代日本小说集》中。

(以下省略)

Ⅲ 「四つの事」 訳文の検討

(1) 訳文A Bの比較

前段までの検討で、『現代日本小説集』『關於作者的説明』の殆どの文章が周作人の手になることが明らかになった。ここでは最後に残された有島武郎の項について検討を進めて行くことにする。冒頭でも述べたように有島「四つの事」を含む文章は三種類存在する。発表順に整理すると次の通りである。

A 一九二二年一月発表

『東方雜誌』19卷1号掲載

周作人訳「潮霧」訳文付記

B 一九二三年六月刊行

『現代日本小説集』（周作人編訳）所収

無署名 附録「關於作者的説明」「有島武郎」

C 一九二三年七月発表

『晨報副鐫』七月一七日掲載

周作人作「有島武郎」（追悼文）

別表3に掲げたとおり、以上のテキストのうちAとBは訳文を含めた文章自体が一部を除き完全に一致する。一致しない箇所とは有島の自死に関する記述のみであり、同一人物がA B双方を書いたと考えなければ不自然であろう。また、Cについては、周作人の単行本『自己的園地』（北京晨報社初版）『談龍集』二冊に収録されており、作者については疑いを容れないが、後述の通りA Bの訳文と異同がある。これらのテキストの異同から、想定しうる可能性は二つに絞られる。

A、訳文Aは周作人の名を借りて、魯迅が翻訳執筆したものである。従って、訳文A Bは魯迅の手になるもので、訳文Cのみ周作人の手にな

る。

イ、訳文Aは周作人の手になるもので、訳文Bは無署名だが、周作人が翻訳執筆したものである。従って、訳文A B、更にCも周作人の手になるものである。

この両者のうち、前者のAは、周作人の名前を借りて魯迅が翻訳執筆した理由が不明であり、現実的とは言えないだろう。確かに訣別以前の二人の間ではしばしばペンネームの貸し借りがあったのは事実で、魯迅の死後に周作人が書いた文章「關於魯迅」「關於魯迅之二」で認めている。だが、周作人のペンネームを使って発表されながら、実は魯迅の作品であったと今日確認されているものは、「古小説鉤沈・序」(一九二二年)『会稽郡故書雜集』(一九二五年)『域外小説集』序(一九二二年)等であり、いずれも序文・単行本の名義においてである。これらは雑誌発表の一篇の翻訳の場合と全く状況を異にしており、魯迅が周作人名義で翻訳を発表したと考えるべき理由は全く見あたらない。¹⁹⁾一方、後者のイについても、問題無しとはできない。同一人物による訳文でありながら、次項で示すように訳文A Bと訳文Cとで訳し方が異なるのである。後者の仮説を成り立たせるには、この訳文の変更に充分な説明を与えられねばならない。

(2) 訳文Cの検討

まず、周作人の翻訳意図を確かめるため、異同箇所にあたる有島の原文を掲げる。²⁰⁾

「四つの事」第二段落

訳文A B || 愛着 訳文C || 欲愛

「有島原文」私はまた、愛するが故に創作をします。

「四つの事」第三段落

訳文A B || 欲愛 訳文C || 欲得愛

「有島原文」私は又愛したいが故に創作をします。

「四つの事」第四段落

訳文A B || 冥頑 訳文C || 頑固

訳文C原文(全文)

別表3の文章との異同箇所には傍線を付した。なお、訳文C中の点線は周作人自身の省略である。

第一、我因为寂寞，所以创作。……

第二、我因为欲爱，所以创作。……

第三、我因为欲得爱，所以创作。……

第四、我又因为欲鞭策自己的生活，所以创作。如何蠢笨而且缺乏向上性的我的生活呵！我厌了这个了。应该脱弃的壳，在我已有几个了。我的作品给我做了鞭策，严重的给我抽打那冥顽的壳。我愿我的生活因了作品而得改造！

【有島原文】私の作品は鞭となつてその頑な殻をきびしくひっぱたいてくれるのだ。

この三つの異同の中で最後の一つは余り大きな変更とは言えないが、他の二つは日本語原文と対照させれば明らかのように、逐語訳としては確かに誤訳としか言いようがない翻訳である。だが、周作人はこの「有島武郎」を『自己的園地』『談龍集』の二冊の単行本に収録しており、単なる誤訳ではなく、当時の周作人の思想を反映した意識と考えられる。この点について、既に別稿でも一部論じたことがあるが、簡単にでも触れておかねばならない。まず、有島の原文をまとめておく。第二段落は「愛する」ことがもたらす生（訳語「生活」）の充実感（訳語「擴充性」）ゆえに「創作をする」というものである。それに対して、第三段落は、創作を通して他者から理解され、愛される喜びに巡り会うため「愛したい」というもので、修辭的な側面を無視してしまえば、他者による理解・愛を得るために「愛したい」と概括できる内容である。この「愛したい」積極的な意志は更に、現に「愛する」がゆえに創作するという第二段落の論旨につながっている。従つて、二段に分かれていているものの、内容的には相互補完的な内容であり、創作を軸とした相互理解への強い希求を物語るものである。周作人はこうした論旨を汲んで、直訳を敢えて捨てて「意訳」したのであると考えられる。また、この改訳で示された文学による相互理解の理想は、数日後に書かれた『自己的園地』自序にも共通して見いだされる。

文芸において他者の心情を理解し、文芸において自分の心情（と同質の心情…小川）を見い出して理解された楽しさを得たいのだ。

この思想は当時の周作人の内面でも大きな位置を占めるもので、訳文Cは、追悼文という形式の中で周作人の有島への共感のありかを明確に示すべく改訳されたものと考えられる。

(3) 『現代日本小説集』後の翻訳書

以上の検討に加え、魯迅との訣別後に刊行された周作人の翻訳書中の「關於作者的説明」に相当する文章も検討し、この章で得られた結論を一部分補強しておきたい。『現代日本小説集』と同系統と見なせる三冊の近現代文学翻訳書中、有島の「潮霧」が二冊に収録されている。

ひとつは『近代日本小説集』（東方雜誌社編・商務印書館一九二四年四月初版）は『東方雜誌』発表の日本文学作品を集めたもので、周作人の翻訳では有島のほか、鈴木三重吉、石川啄木の作品を収め、巻末に「作者傳略」を付している。いまひとつは『兩條血痕及其他』（周作人編訳・

開明書店一九二七年十月初版）は周作人の專著で、有島のほか、石川啄木・武者小路実篤・長與善郎の作品を収め、各篇末尾に作者紹介を付している。⁽²⁵⁾

前者の「作者傳略」中の有島の項は、個人雜誌「泉」刊行・有島の自死を新たに加筆した部分を除き、訳文Aと完全に一致する。また、後者は訳文Aの文末に有島武郎の自死の記事をつけ加える形で加筆されており、その他は全て一致する。このように魯迅との訣別後も周作人が訳文Aを再三にわたり加筆して自著に収録している事実は、訳文Aが魯迅の手になる文章ではありえないことを改めて裏付けるものであろう。

結語 周作人に於ける有島文学受容

有島文学の影響は魯迅との関連に於いてのみ注目されてきたために、「四つの事」の翻訳者の問題は自明のものとして取り上げられることはなかった。しかし、これまでの日記書簡による成立経緯の検討、各テキスト間の比較検討は、一致して有島をはじめとする「關於作者的説明」が殆ど周作人の手になることを裏づけている。有島文学が周作人にも一定の影響を与えたことはもはや疑いを容れないであらう。

その影響は、有島の自死の報に接して書かれた追悼文「有島武郎」に鮮明に見いだせる。文中、周作人は留学中に幸徳秋水処刑の号外に接した時と同様に驚いたと語り、驚きの理由こそ違うが「彼らの死は私達を嘆き悲しませるだけではないからだ。」と語る。有島の死が周作人にもたらしたのは単なる死者への哀悼の気持ちだけではなく、そこには同時代を生きた有島と共有していた理想の破産への哀惜が含まれていた。訳文Cを引いた後、周作人は追悼文の最後を次のように締めくくっている。

本当に世間という大砂漠では何事に出くわすかも分からず、幾人かの同行者を遠く近くに見いだすことだけが、幾らかでも淋しく空しい気持ち⁽²⁶⁾をまぎらわせるのだ。

「同行者」とは理想の共有者の謂であらう。その「同行者」の死は、周作人に理想の破産を明確に意識させる結果となった。追悼文の一週間後に執筆した「自己的園地」序文では、次のように語っている。

既に私の過去のバラ色の夢は全て幻であったと、はっきり知っているのに、私はまだ探し求めている——これは生きる者の弱みだ——想像上の友人を、凡人の心を理解できる読者⁽²⁷⁾を。

この序文に「四つの事」と共通の相互理解が見いだされることは既に指摘した通りである。ここで語られる「バラ色の夢」に終わった理想への哀惜は、相互理解破産の自覚であり、以後周作人は『自己的園地』を最後に五四時期の文学観と訣別することになる。有島の死は当時二一―三年にかけて変容しつつあった周作人の文学観²⁹を決定づけるものであったと考えられる。(1991・9・15)

注記

- (1) 例えば、山田敬三『魯迅の世界』(大修館書店一九七七年刊) 所収「魯迅と白樺派の作家達」、長堀祐造「魯迅革命論に於けるトロツキー文芸理論」(中国学会報第四〇集) など
- (2) 周作人『現代日本小説集』(商務印書館一九三三年六月刊) 序文。ここには魯迅が担当した芥川龍之介の名前が欠落している。
- (3) 『魯迅全集』(人民文学出版社一九八七年第三次印刷) 第十一卷書信210829、以下、『魯迅全集』からの引用文は拙訳によったが、『魯迅全集』(学習研究社一九八五年六月刊) 第十四卷(書簡I) を参照させていただいた。
- (4) 『魯迅全集』第十一卷書信210630、また210825で述べる武者小路実篤「ある日の一休」は、雑誌発表しかなく、定稿でないと魯迅が反対したため採録されなかった。周作人は後に『兩條血痕及其他』(開明書店一九二七年十月刊) に、これを収録している。
- (5) 『胡適来往書信選』上冊(中華書局香港分局一九八三年十一月刊) 118及び120。なお、周建人はこれまで北京大学の聴講生で、定職がなかった。この就職によって、北京を離れたがらぬ妻と別居する形となり、数年後には離婚している。
- (6) 『胡適来往書信選』上冊120
- (7) 『胡適的日記』(中華書局一九八五年一月刊) によれば、二二年七月一日より九月七日まで滞在した。
- (8) 『魯迅全集』第十一卷書信210904
- (9) 小川が実見した初版、三版本には胡適校と印刷されていないが、『民国時期総書目』(外国文学) は再版本表紙に胡適校と印刷されていると指摘する。なお、この点については、既に飯倉照平氏の論考「北京の芥川龍之介」(『文学』岩波書店一九八一年七月号) にも同様の指摘がある。
- (10) 『魯迅研究資料18』(中国文联出版公司一九八七年十月刊) 所収「周作人日記」八二頁
- (11) 『魯迅研究資料18』 所収「周作人日記」九五―八頁
- (12) 江口渙について依拠したと考えられる魯迅・周作人の文章は見いだせなかった。周作人が『現代日本小説集』編集の段階で手元の資料をもとに書いたと想像されるが、事実上証明不可能である。江馬修「小さい一人」は周作人の『点滴』にも収録されているが、同書中の訳文付記は雑誌『新青年』(第五卷六号) 掲載の訳文付記と全く同一で、『現代日本小説集』とは共通点も多いが同一ではない。なお、『点滴』(初版) は桜美林大学長堀祐造先生御架蔵のものをお借りした。
- (13) 『魯迅全集』第十二卷(学習研究社一九八五年九月刊) 二八八―九頁・訳注(一) 及び(二二)
- (14) 『藝術与生活』(岳麓書社一九八九年六月刊) 所収。夏目漱石、森鷗外の項はそれぞれ一四五―六頁、一四六―七頁。なお、同文中での国木田の紹介も「關於作者的説明」で用いられている。
- (15) 『自己的園地』(晨報社初版本)、『談龍集』 所収
- (16) 『日本近三十年小説之発達』中の周作人訳「あそび」(部分) と『現代日本小説集』所収の魯迅訳とは殆ど一致しない。

(17)『魯迅全集』第十卷所収。

(18)周作人が「關於魯迅」で魯迅「熱風」の雜文數篇が自分のものであると主張しているのは検討に値する問題だが、今のところ裏付けが殆どない。倪墨炎が「中国的叛徒與隱士」「24、魯迅(熱風)中有否周作人雜文」(上海文芸出版社一九九〇年七月刊)で論じているのは、殆ど無視された格好である。

(19)更に補足すれば、訳文Aは省いた形の翻訳「潮霧」は、魯迅の短篇「兎と猫」とともに、二人の顔写真と簡単な紹介がつけ加えられて、日本語雑誌『北京週報』四七号に転載されている。これを考え併せれば、訳文Aが魯迅の文章であった可能性は更に低くなるであろう。なお、『北京週報』への転載については東京大学の藤井省三先生から御示教賜った。記して感謝したい。

(20)有島の原文は『有島武郎著作集』第十一輯(叢文閣大正九年二月三六版)一五二―三頁による。

(21)例えば『実用解字組詞詞典』(周士發編著・上海辞書出版社一九八六年五月刊)では「冥頑」は愚か、無知、「頑固」はかたくな、容易に教えを受け入れない、と区別しているように、厳密に言えば、違いは認められるが、この場合周作人の「四つの事」解釈に大きな影響を与えることはないだろう。

(22)拙稿「五四時期の周作人の文学観」(中国学会報第四二集)を併せて、参照頂ければ幸いである。

(23)『自己的園地』(農報社初版本)所収

(24)ここでの翻訳書は『周作人研究資料』及び『民国時期繪書目』(外国文学)などに拠り、小川が実見しえた範囲でのものである。他にも有島の作品を収録していないものの、『小説月報』掲載の作品を集めた『日本小説集』(小説月報社編・小説月報叢刊第四十七種・商務印書館一九二五年四月初版)がある。また、更に『少年的悲哀』(施洛英編・啓明書局一九四一年七月初版)が存在し、周作人訳『小なき者へ』を収めるが、盗版と考えられる。

(25)前者は商務印書館が版元であり、周作人の文章を編集者が勝手に改竄するとは考えにくく、後者には周作人の序文があり、いずれも周作人の意向を無視しているとは考えられない。

(26)『自己的園地』所収

(27)同右

(28)同右

(29)この点についても、拙稿「五四時期の周作人の文学観」(中国学会報第四二集)を併せて、参照頂ければ幸いである。

【補記】

本稿脱稿後、劉岸偉著『東洋人の悲哀——周作人と日本』(河出書房新社一九九〇年八月三〇日刊)一五六―九頁でも『現代日本小説集』の成立過程に言及されているのを知った。文中、著者は周作人『日本近三十年小説之発達』での夏目漱石・森鷗外に関する説明が『現代日本小説集』附録での説明文と極めて類似している旨、小谷氏と同様の指摘をされている。